

令和八年度 全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会

知事賞

最優秀賞

中央審査

優秀賞(国土交通大臣賞)

「一滴の雨水をつなぐ」

愛媛大学教育学部附属中学校 三年

ひろまつ しいな
弘松 詩菜

蛇口をひねれば透き通った水が勢いよく流れ出す。度重なる渇水の歴史を持つ私の街・松山では、それが当たり前ではないと知っている人たちがすぐそばにいる。私の親の世代は、平成六年の「平成の大渇水」で一日の大半が水の出ない時間断水を百二十三日も経験したという。水が出ない不自由さと、一滴の重みを知る人々がそばにいるのに、便利な環境で育った私はその記録をどこか遠い出来事のように受け止めている。

地球にやさしくという言葉をよく耳にする。しかし、空気や水がなければ生きられない人間が自然を「守ってあげている」かのように振る舞うのは傲慢ではないか。人間は地球という大きな循環の中に「いさせてもらっている」存在にすぎないのに、私はいつの間にか水を「コントロールできる資源」として扱っていた。その無意識の姿勢が形となって現れているものの一つが雨の日の傘袋だ。商業施設の入り口に設置されてゴミとして散らばる傘袋を目にするたびにモヤ々としていた。使い捨ての傘袋はエコではないし、渇水に悩む街で、傘について雨水を「汚れ」として袋に閉じ込め捨ててしまうことも違和感の一つだった。本来なら土に染み込み、川へ還り、命をつなぐはずの雨水が、建物に入った瞬間に循環を断ち切られてしまう。外では命をつなぐ水が建物の中では汚れになる。

松山市は、ダムの底が見えるほどの渇水を何度も経験し、先人たちは節水型都市づくりに力を注ぎ、今でも広報車が節水を呼びかけている。しかし、私たちの意識はどうだろう。蛇口をひねれば水が出ることを疑わない私たちは、一滴の重みも感じずに水を使い続ける。高度

なインフラが整った安心感が水への敬意を薄れさせているのではないか。

その気づきが、愛媛大学のジュニアドクターでの私の研究につながった。行政が管理する地下タンクや配管の中で行われる循環は『見えない』。見えない循環は人の意識を変えない。だからこそ、多くの人が行き交う場所で雨水が命に戻る瞬間を『見える形』で示したいと考えた。

私が作ろうとしている装置とは、足踏み脱穀機のような形で人力でエアを送り傘の水滴を飛ばす仕組みだ。飛ばした雨水は下に集め、装置のそばに置いた観葉植物に与えることを想定している。自分の足の動きで飛ばした雨粒が目の前の上に吸い込まれていく。その瞬間「自分が雨水の循環に関わっている」という実感が生まれる。集まる水は一回につき数ミリリットル。植物を育てるには到底足りないし実用化も簡単ではない。それでも、この研究には大きな意味があると考えている。

二年が過ぎても、小さな改良を積み重ねながらチューブやプラ粘土と格闘し試作を続ける日々の中で、こんな少量の水に興味があるのか、やめたい、それでもやり遂げてみせるという気持ちが続いている。うまくいかない日々がモチベーションも削っていく。これは装置との戦いであると同時に、諦めそうになる自分自身との戦いでもある。行政が運用する巨大なシステムがあつてこそ私たちの暮らしは守られている。それでも私の小さな装置にしかできないこともあると信じて迷い悩みながらも続けている。装置が完成し、街で使われる日が来ることを目指して私は一滴の水に向き合い続ける。その小さな行動が、水について考える人を一人でも増やせるかもしれない。

自然にやさしくするのではなく、自然にやさしくしてもらえるように生きていきたい。水を与えてもらい続けるために、考え、向き合い、小さくても行動を重ねること。その思いが今週末も私を試作品作りに向かわせる。その見えない積み重ねが、水の循環の中に私をつなぎなおしていく。